

2.3 エルミート行列のユニタリー行列による対角化

講義も今回が最後なので、駆け足になるが表題の問題まで議論をしよう。

定義 2.14 計量線型空間 L の部分集合 S が次の性質を満たすとき正規直交系 (orthonormal system) という:

$$\begin{aligned}(x, x) &= 1 & x \in S \\ (x, y) &= 0 & x, y \in S, x \neq y\end{aligned}$$

例えば $L = C^n$ とし、 e_1, \dots, e_n を基本ベクトルとすると $S = \{e_1, \dots, e_n\}$ は正規直交系である。

例 2.15 $L = \{f \in C^0(\mathbf{R}, \mathbf{C}) \mid f \text{ は周期 } 1 \text{ の周期関数}\}$ とする。 $e_k(x) = e^{2\pi kix}$ と定義すると、 $S = \{e_0(x), e_{\pm 1}(x), \dots, e_{\pm n}(x), \dots\}$ は正規直交系である。 $f \in L$ に対し内積

$$(f, e_k) = \int_0^{2\pi} f(x) e^{-kix} dx$$

は f の k 番目の複素フーリエ係数と呼ばれる。

$$T = \{1, \cos 2\pi x, \cos 4\pi x, \dots, \cos 2\pi kx, \dots, \sin 2\pi x, \sin 4\pi x, \dots, \sin 2\pi kx, \dots\}$$

も L の正規直交系である。 $f \in L$ に対し内積

$$(f, \cos 2\pi kx) = \int_0^{2\pi} f(x) \cos 2\pi kx dx \quad (f, \sin 2\pi kx) = \int_0^{2\pi} f(x) \sin 2\pi kx dx$$

は f のフーリエ係数と呼ばれる。

演習問題 2.6 S が正規直交系のとき 1 次独立系である事を示せ。

演習問題 2.7 x_1, \dots, x_n がお互いに直交するとき

$$\|x_1 + \dots + x_n\|^2 = \|x_1\|^2 + \dots + \|x_n\|^2$$

が成立する事を示せ。

演習問題 2.8 [ベッセルの不等式] $S = \{x_1, x_2, \dots, x_n\}$ を正規直交系とする。任意のベクトル $x \in L$ に対し

$$|(x, x_1)|^2 + |(x, x_2)|^2 + \dots + |(x, x_n)|^2 \leq \|x\|^2$$

が成立する。等号成立は x が x_1, \dots, x_n の線型結合で書けるときに限る。

命題 2.16 $S = \{v_1, v_2, \dots, v_n, \dots\}$ を線型空間 L の 1 次独立系とする。次の操作で得られる $T = \{x_1, x_2, \dots, x_n, \dots\}$ をは正規直交系である:

(1st step) ; $x_1 = \frac{v_1}{\|v_1\|}$ と置く。

(2nd step) ; $x'_2 = v_2 - (v_2, x_1)x_1$ と置き , $x_2 = \frac{x'_2}{\|x'_2\|}$ と置く。

(n -th step) ; x_1, \dots, x_{n-1} までは選ばれているものとする。 $x'_n = v_n - (v_n, x_1)x_1 - \dots - (v_n, x_{n-1})x_{n-1}$ と置き , $x_n = \frac{x'_n}{\|x'_n\|}$ と置く。

証明 数学的帰納法で証明する。各 n に対し $\|x_n\| = 1$ かつ $(x_n, x_i) = 0$ ($i = 1, \dots, n-1$) を示せばよい。 $n = 1$ のときは明らか。 $n = k$ までの成立を仮定する。 $x'_{k+1} = v_{k+1} - (v_{k+1}, x_1)x_1 - \dots - (v_{k+1}, x_k)x_k$ なので $i < k+1$ に対して $(x'_{k+1}, x_i) = (v_{k+1}, x_i) - (v_{k+1}, x_1)(x_1, x_i) - \dots - (v_{k+1}, x_i)(x_i, x_i) - \dots - (v_{k+1}, x_k)(x_k, x_i)$ $j \neq i$ となる j に関しては $(x_j, x_i) = 0$ なので $(x'_{k+1}, x_i) = (v_{k+1}, x_i) - (v_{k+1}, x_i)(x_i, x_i) = (v_{k+1}, x_i) - (v_{k+1}, x_i) = 0$ となり $k+1$ でも成立している。証明中 1 次独立性を用いていない様に見えるがそうではない。 x'_i を作ったとき一般には $x'_i = 0$ である可能性がある。これを排除するのが 1 次独立性である。 ■

L の正規直交系で基底になっているものを正規直交基底 (orthonormal basis) と呼ぶ。有限次元計量線型空間には基底が存在するので、正規直交基底も存在する事が分かる。

定義 2.17 L を計量線型空間とし、 S をその部分集合とする。そのとき

$$S^\perp = \{x \in L \mid \text{任意の } y \in S \text{ に対し } (x, y) = 0\}$$

を S の直交補空間という。

演習問題 2.9 直交補空間 S^\perp は L の部分空間である事を示せ。

命題 2.18 M を有限次元計量線型空間 L の部分空間とする。このとき次が成立する。

- (1) $L = M \oplus M^\perp$ が成立する。
- (2) $(M^\perp)^\perp = M$ である。

証明 v_1, \dots, v_k を M の基底とする。これにベクトルを v_{k+1}, \dots, v_n を加えて L の基底を作る。このとき命題 2.16 の方法を用いて L の正規直交基底 x_1, \dots, x_n を作る事ができる。このとき x_1, \dots, x_k は M の正規直交基底になっている。これから $L = M + M^\perp$ かつ $M \cap M^\perp = \{0\}$ が分かるので $L = M \oplus M^\perp$ が分かる。(2) は (1) から従う。 ■

演習問題 2.10 M_1, M_2 を有限次元計量線型空間 L の部分空間とすると、次を示せ。

- (1) M_1 の任意の元と M_2 の任意の元が直交しているとき、 M_1 と M_2 は直交するといい、 $M_1 \perp M_2$ と書くとき $M_1 \perp M_2 \iff M_1 \subseteq M_2^\perp \iff M_2 \subseteq M_1^\perp$ が成立する。
- (2) $M_1 \subseteq M_2$ ならば $M_2^\perp \subseteq M_1^\perp$
- (3) $(M_1 + M_2)^\perp = M_1^\perp \cap M_2^\perp$
- (4) $(M_1 \cap M_2)^\perp = M_1^\perp + M_2^\perp$

以下では計量線型空間 L は有限次元である事を仮定し, 基底としては正規直交基底に限る事にする。 L から L への (これを L 上のという) 線型写像を T とする。 T に対し次の性質を満たす L 上の線型写像 T^* を T の随伴写像 (*adjoint mapping*) と呼ぶ: 任意の $x, y \in L$ に対し

$$(T(x), y) = (x, T^*(y))$$

が成立する。

命題 2.19 $S = \{x_1, \dots, x_n\}$ を L の正規直交基底とする。 そのとき任意の $x, y \in L$ に対し

$$(x, y) = (\Phi_S(x), \Phi_S(y))$$

が成立する。ここで (x, y) は L の内積, $(\Phi_S(x), \Phi_S(y))$ は K^n の内積である。

証明 $x = x_1x_1 + \dots + x_nx_n, y = y_1x_1 + \dots + y_nx_n$ とすると $\Phi_S(x) = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}, \Phi_S(y) =$

$\begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix}$ となる。ここで $(x, y) = (x_1x_1 + \dots + x_nx_n, y) = x_1(x_1, y) + \dots + x_n(x_n, y) =$

$$x_1 \sum_{i=1}^n y_i(x_1, x_i) + \dots + x_n \sum_{i=1}^n y_n(x_n, x_i) = x_1y_1(x_1, x_1) + \dots + x_ny_n(x_n, x_n) = x_1y_1 + \dots + x_ny_n$$

となる。一方 $(\Phi_S(x), \Phi_S(y)) = \left(\begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix} \right) = x_1y_1 + \dots + x_ny_n$ なので等号が成立す

る。 ■

命題 2.20 T を L 上の線型写像とし, $S = \{x_1, \dots, x_n\}$ を L の正規直交基底とする。 T の S に関する表現行列を A とし, $A^* = (\overline{A})^T$ とする。 S に関し A^* で表現される L の線型写像 T' は T の随伴写像になっている。

証明 最初に, 任意の $u, v \in K^n$ に対し $(Au, v) = (Au)^T \overline{v} = u^T A^T \overline{v} = u^T \overline{A^T v} = u^T \overline{A^* v} = (u, A^* v)$ が成立する事を確認しておこう。 任意の $x, y \in L$ に対し命題 2.19 を用いると

$$\begin{aligned} (T(x), y) &= (\varphi_S(T(x)), \Phi_S(y)) = (A\Phi_S(x), \Phi_S(y)) \\ &= (\Phi_S(x), A^*\Phi_S(y)) = (\Phi_S(x), T'(\Phi_S(y))) \\ &= (x, T'(y)) \end{aligned}$$

が得られる。 ■

定義 2.21 $T : L \rightarrow L$ を線型写像とする。 $T = T^*$ が成立するときエルミート変換 (*Hermitian transformation*) という。 また任意の $x, y \in L$ に対し

$$(T(x), T(y)) = (x, y)$$

が成立するときユニタリー変換 (unitary transformation) という。特に $K = R$ の場合直交変換 (orthonormal transformation) という。

正方行列 A に対し $A = A^*$ を満たすときエルミート行列 (Hermitian matrix) という。また $A^*A = E$ を満たすときユニタリー行列 (unitary matrix) という。特に $K = R$ のとき、即ち $A^T A = E$ となるとき直交行列 (orthonormal matrix) という。

演習問題 2.11 線型写像 T の正規直交基底による表現行列を A とするとき次を示せ。

- (1) T はエルミート変換 $\iff A$ はエルミート行列
- (2) T はユニタリー変換 $\iff A$ はユニタリー行列

この節の目標に立ち帰ろう。 S を計量線型空間 L の正規直交基底とする。 $x \in L$ に対し $v = \Phi_S(x)$ と置くと

$$T(x) = \lambda x \quad (x \neq 0) \iff Av = \lambda v \quad (v \neq 0)$$

であった。線型解析で学んだように λ が $\lambda \in K$ であって固有方程式 $f_A(t) = \det(A - tE) = 0$ の解になるとき A の固有値であった。エルミート行列の場合この制限はいらない事が分かる。

命題 2.22 エルミート行列 A に対し $f_A(t) = 0$ の解 λ は実数である。従ってエルミート行列 A に対し固有値は存在する。

これをエルミート変換の言葉に翻訳すると $L \neq \{0\}$ 上のエルミート変換 T に対しその固有値は存在してそれは実数である。

証明 λ を $f_A(t) = 0$ の解とする。 C^n の世界で考えると固有ベクトル x が存在する。このとき $(Ax, x) = (\lambda x, x) = \lambda(x, x)$ であり、 $(Ax, x) = (x, A^*x) = (x, Ax) = (x, \lambda x) = \bar{\lambda}(x, x)$ となる。 $(x, x) \neq 0$ より $\lambda = \bar{\lambda}$ が分かる。■

命題 2.23 λ_1, λ_2 を L 上のエルミート変換 T の相異なる固有値とする。 $i = 1, 2$ に対し x_i を λ_i に属する固有ベクトルとすると、 x_1 と x_2 は直交する、即ち $(x_1, x_2) = 0$ となる。

証明 $(T(x_1), x_2) = (\lambda_1 x_1, x_2) = \lambda_1(x_1, x_2)$ であり、 $(T(x_1), x_2) = (x_1, T(x_2)) = (x_1, \lambda_2 x_2) = \lambda_2(x_1, x_2)$ より $(\lambda_1 - \lambda_2)(x_1, x_2) = 0$ となる。 $\lambda_1 - \lambda_2 \neq 0$ より $(x_1, x_2) = 0$ となる。■

命題 2.23 より $\lambda_1, \dots, \lambda_k$ を T の相異なる固有値とし、 $E(\lambda_i)$ を λ_i に属する固有空間とすると

$$E(\lambda_1) \oplus \dots \oplus E(\lambda_k)$$

となる。これが L 全体に一致する事を主張するのが次の定理であり、この節の目標であった。

定理 2.24 $\lambda_1, \dots, \lambda_k$ を L 上のエルミート変換 T の相異なるすべての固有値とすると

$$L = E(\lambda_1) \oplus \dots \oplus E(\lambda_k)$$

が成立する。

証明 $M = (E(\lambda_1) \oplus \dots \oplus E(\lambda_k))^\perp$ と置くと $L = E(\lambda_1) \oplus \dots \oplus E(\lambda_k) \oplus M$ が成立しているので、 $M = \{0\}$ を示せばよい。よって $M \neq \{0\}$ と仮定する。最初に $T(M) = \{T(y) \mid y \in M\} \subseteq M$ を示す。 y' を任意の $T(M)$ の元とすると、ある $y \in M$ が存在して $y' = T(y)$ となっている。 y は $y \in (E(\lambda_1) \oplus \dots \oplus E(\lambda_k))^\perp = M$ の元であるから、任意の $x \in E(\lambda_1) \oplus \dots \oplus E(\lambda_k)$ に対し $(y, x) = 0$

が成立している。 $x = x_1 + \cdots + x_n$ ($x_i \in E(\lambda_i)$) と書き表しておく。 $(y', x) = (T(y), x) = (y, T(x)) = (y, T(x_1 + \cdots + x_n)) = (y, T(x_1) + \cdots + T(x_n)) = (y, T(x_1)) + \cdots + (y, T(x_n)) = (y, \lambda_1 x_1) + \cdots + (y, \lambda_n x_n) = \lambda_1 (y, x_1) + \cdots + \lambda_n (y, x_n) = \lambda_1 \cdot 0 + \cdots + \lambda_n \cdot 0 = 0$ となるので $y' \in M$ が分かる。ここで T を M に制限したものを $T_1 = T|_M$ と置くと T_1 は M 上の線型写像になるが、任意の $x, y \in M$ に対し $(T_1(x), y) = (x, T_1(y))$ が成立するのでエルミート変換になっている。命題 2.22 より T_1 には固有値が存在する。 T_1 の固有値は T の固有値となる。よってそれは λ_i のどれかになっているが、その固有値に対応する固有ベクトル $x \in M$ は λ_i に属する T の固有ベクトルでもあるので $x \in E(\lambda_i)$ になりこれは矛盾。 ■

この定理を表現行列の言葉で述べると次の系が得られる。

系 2.25 T を L のエルミート変換とすると L のある正規直交基底 S で表現行列が対角行列になるものが存在する。

証明 正規基底としてすべて固有ベクトルであるものが取れる。それに関する表現行列は対角行列となっている。 ■

行列の対角化に言い替えると次が得られる。

系 2.26 エルミート行列はユニタリー行列により対角化できる。

証明 n 次ユニタリー行列 A を C^n 上の線型写像と考える。正規直交基底を $S = \{x_1, \dots, x_n\}$ とする。 $U = (x_1 \cdots x_n)$ とおくと U はユニタリー行列になり、 $U^{-1}AU$ が対角行列になる。 ■

系 2.27 実対称行列は直交行列により対角化できる。

証明 n 次直交行列 A を R^n 上の線型写像と考える。正規直交基底を $S = \{x_1, \dots, x_n\}$ とする。 $O = (x_1 \cdots x_n)$ とおくと O は直交行列になり、 $O^{-1}AO$ が対角行列になる。 ■